

介護やケアを担うヤングケアラー調査 藤沢では教員の半数が「いる」と回答

ユキちゃんは小学5年生。お母さんとの二人暮らしです。

お母さんはこのごろ仕事を休んで寝込むことが多くなりました。“うつ”という言葉を知りましたが、ユキちゃんにはよく意味がわかりません。

ただ、お母さんがシクシク泣いていたり、ときどき「死にたい」などつぶやくのを聞くと、ユキちゃんは心配でなりません。

そんなとき、ユキちゃんは学校を休んでお母さんのそばにいます。買い物や家事など、お手伝いも一生懸命にしました。

小学生のユキちゃんには市役所に相談したり、ヘルパーさんを頼む、なんていう知識がありません。近所に相談できる人もいません。

ある日、学校でユキちゃんは先生から叱られました。「ユキさん、このごろどうしたの？ 宿題もやってこないし、忘れものばかりじゃない！」

お母さんが…と言おうと思いましたが、先生の怖い顔を見るとユキちゃんは何も言えませんでした…（※今回の調査で報告のあった話ではありません）

ヤングケアラー

私たちはいままで、「介護」や「ケア」と言えば中高年以降の課題だと思ってきたのかもしれませんが。

ですが、いま日本では急速な少子高齢化が進んでいます。これに晩婚化やひとり親世帯の増加などが加われば、介護の担い手はおのずと低年齢化せざるを得ません。

大人に代わって介護や家事などを担う18歳未満の子どものことを「ヤングケアラー」と言います。日本でこの「ヤングケアラー」の問題に注目して調査



©日本ケアラー連盟

を始めたのは、一般社団法人日本ケアラー連盟・ヤングケアラープロジェクトの皆さんです。

同プロジェクトは2015年、新潟県南魚沼市で公

立小・中学校の全教員を対象に日本では初めての「ヤングケアラー実態調査」を行いました。

その結果、4人に1人の教員が「現在、または過去にヤングケアラーに出会ったことがある」と回答しました。これは画期的な調査でした。

そして昨年7月、日本で2例め、都市部としては初めての調査が藤沢市で行われたのです。

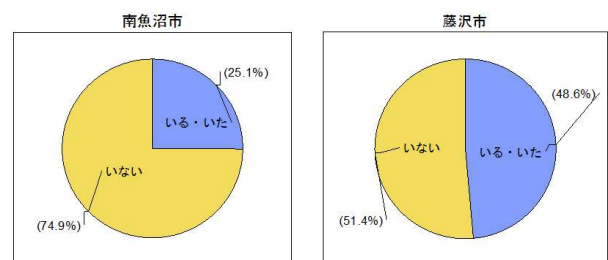


©日本ケアラー連盟

教師の半数がヤングケアラーに出会う

この調査は藤沢市の小・中・特別支援学校の全教員を対象に行われ、1098人から回答がありました。

そのうち「現在、または過去にヤングケアラーに出会ったことがある」という回答は48.6%にのびりました。南魚沼調査では25.1%でしたから、倍近くになります。これは顕著な違いでした。



この違いはどこから来るのでしょうか。

調査報告書は、「困りごとに直面している子どもたち1人ひとりにきめ細かな支援などを行う『支援教育』の考え方にに基づき、これまでもさまざまな話し合いを行ってきたという土壌」が藤沢にはあるため、と評価してくれています。

この数字はヤングケアラーの“認知率”であって、“出現率”ではありません。ですが、藤沢は人間関係が薄くなりがちな都市部に位置します。その影響があるかどうかは、引き続き検討が必要でしょう。

家事やきょうだいの世話をする子どもたち

担っているケアの内容としては「料理・掃除・洗濯

などの家事」がもっとも多く、次いで「きょうだいの世話」「精神疾患などに対する感情面のサポート」が続きました。また少数ではありますが、「服薬管理やたんの吸引などの医療的な世話」「入浴・トイレ・体ふきなどの身体介助」など、大人がするような介護を担っている子どももいました。

	藤沢市 (回答数508)	南魚沼市 (回答数65)
家事(料理・掃除・洗濯など)	275	35
生活のための買い物、家の中の整理など	99	6
請求書の支払い、病院の付き添い、通訳	30	3
食事や着替えの介助、移動介助など	83	11
医療的な世話(服薬管理、痰の吸引など)	5	1
感情面のサポート(見守り、元気づけ)	67	11
身体介助(入浴、トイレ、体ふきなど)	13	4
きょうだいの世話	268	31
その他	33	5

こうした傾向は、南魚沼市と藤沢市で大きな違いはありません。

ケアを担うことによる影響については「欠席」がもっとも多く、ついで「学力がふるわない」「遅刻」と続きました。

	藤沢市 (回答数508)	南魚沼市 (回答数65)
遅刻	201	21
早退	43	6
欠席	286	23
忘れ物	134	13
宿題をしてこない	141	18
学力がふるわない	212	15
衛生面がおもわしくない	86	12
栄養面がおもわしくない	79	6
部活などの課外活動ができない	60	6
友達やクラスメイトとの関係がおもわしくない	83	13

「遅刻や忘れものをする」「宿題をしてこない」子どもは、ともすれば「問題のある子」と見られがちです。しかし、その背景にこうした介護やケアがあるかもしれないという視点は、支援教育の大切な基本です。

ある校長先生は、「この調査は『子どもをどう見るか』という視点を私たちに与えてくれるものだ」と話してくださいました。

社会的な支援を

藤沢市の調査では、たくさんの先生が記述欄に自身の出会った子どもの様子を報告してくれていました。

おもな内容をあげてみます。(個人情報の問題がありますので、少し編集してあります)

- 母親が心を病んでいるため子どもが付きそっており、そのため学校を休むことがある。
- 親にかわって買い物や料理、きょうだいの保育園への送り迎えや風呂の世話をしている。
- 日本語のわからない外国籍の母親のために、学校を休んで通訳として病院に付きそう。
- 別居している祖父母の家へ行き、体の弱い祖母の代わりに祖父の介助をしている。

もちろん、この子たちは進んで「お手伝い」をしている場合もあります。家族のケアがその子どもたちの人間的な成長につながることもあるでしょう。マイナスばかりとは限りません。

ですがケアのために学校を休んだり、勉強が遅れたりしたのでは、もはや「お手伝い」では済みません。

友だちと遊べず、部活動にも参加できません。進学や就職に影響が出ることもあります。そこまでの重い責任を、未成年の子どもに負わせて良いのでしょうか。そのような場合には、社会的な支援が必要はらずです。

気づき、つなぐ

ケアを担っている子どもたちの多くは、自ら「助けてほしい」と声をあげることができません。ですから周囲の大人の“気づき”はとても大切です。そのために学校の果たす役割は少なくありません。

もちろん、学校がすべてを担うことを求めているわけではありません。学校の役割はまず“気づき”、理解することです。そして欠席や忘れものなどには柔軟な配慮をした上で、スクールソーシャルワーカーなどを通して支援に“つなぐ”ことです。

日本ではまだ、ヤングケアラーへの支援は具体化されていません。ですが既存の介護者支援の制度の中には、少し運用を変えればヤングケアラーへの支援に使えるものもあるはずはです。

6月市議会では、鈴木恒夫市長は私の質問に対して「**ケアを担っている多くの子どもたちが存在するという実態が明らかになったことを、改めて重く受け止め……新たな支援策や、適切に支援につなげるための体制づくりを検討する**」と答弁してくださいました。

介護やケアは、中学を卒業すれば終わるわけではありません。大学生や社会人の「若者ケアラー」はより大きな役割を負うと同時に、進学や就職、結婚などへの影響もさらに深刻です。今後、この若者ケアラーについての調査と支援策の検討が必要です。

この調査が、「ヤングケアラーへの支援」という未開拓の分野に新しい道を開くことを願っています。